

いわかぎみ

令和四年十二月 第九一号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(10)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑧ランビキ)
- ◇ 方言一考(ひとかたげ)
- ◇ モノ言うもの(一揆禁止の高札)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(10)

峠を越えた人たち①

イザベラ・バード

渡辺 伸 栄

盆地の我が村に、無数の峠。峠は手向け。来る者は拒まず、去る者は追わず。有名無名、峠を越えた人々のエピソード。

初回はイザベラ・バード

隣の置賜で「米沢街道十三峠」と言えば、「ああ、バードかっ」と返ってくる。それほどの超有名な。何しろ、置賜盆地を指さして

「おー、東洋のアルカディア！」と褒め称えた人だから。

今さらバードでもないだろう、と言われるのがおちか？いや、まてまて、今回は、アルカディアではなく、我が村の話だ。

明治十一年七月十一日

この日、バードは黒川を出発して沼に宿泊した。

我が村の通過は、悪路と大雨で大変な苦勞だった。だからか、村の中心部については、クルマで「関」を通ったと書くだけで、ほかに何も無い。

クルマとは人力車のこと。雨の中、人力車に乗って通過に精一杯。周りを見る余裕もなかったのだろうというのが通説らしい。

ところが、世の中には、通説ぐらいでは納得しない人が必ずいる。こういう人のおかげで、誤った歴史は塗り替えられ、進歩する。

見ず知らずのメール

去年のこと。大学教授を退職後、バードの旅程を研究していると自己紹介が始まるメール。

バードが関川村を通過しているなら、有名な渡邊邸を書かないなんてありえない。きっと下関を通っていないのではないかと、考

えていた時に、私のHP「古道探索記」が目にとまったのだと。

黒川から下関を通らず上関へ出る古道があるのではないかと。その辺りの古道の詳細を教えてください。これがメールの主旨。

「バードの日本紀行」

もう十年以上前のこと。この本(講談社学術文庫)を読んだとき私も、渡邊邸が出てこないのはおかしいと思った。あの大邸宅のすぐ前の道を通っていながら、どうしたことかと。

日光で泊まった金谷邸については、邸内の素晴らしさともに、その家族の暮らしについても詳しく書いています。家人の教養と文化の高さ、しつけと教育の行き届いた子どもたち。よほど感心したらしい。



旧黒沢宿「バードの腰かけ石」はこれ？

→ 黒沢宿

もし、渡邊邸に泊まっていたら

渡邊家の文化と財力は、金谷家以上。アルカディアどころか、「おー、ハイカルチャー」とか「アカデミカリー」とか、言ってくれたのでは。

金谷邸はその後ホテルになって、今も、バードの部屋が保存されているらしい。渡邊邸にも泊まっていたら、村の名所がもう一つ増えたのに。

が、しかし、よく考えてみれば、渡邊邸は旅館ではない。今でいえば商社兼金融業。だから、泊めてもらおうなどと思うはずもない。ついでに言えば、渡邊邸を豪農の館というのもどうなのかと思うが、今はそれに触れない。

さて、彼のメールの件

バードが、通ったと書いた「関」は、下関ではなく上関だと、メールの主はおっしゃる。そこが気に入った。

いつかの「いわかがみ」（八六号）でも書いたが、関は関所の関。関所は上関にあった。だから、「関」は上関。この方、よく分かっていらっしやる。すばらしい。

だから、古道の地図を添えて丁寧返信した。

現在のR二九〇の大長谷から幾地、鮎谷、

安角、沼へ、米沢街道の裏道「名倉道」。その途中、鮎谷からは下川口へつながる。大石川左岸を通れば六本杉。ここは上関村の内。とはいえ、六本杉を「関」というには無理があり、これはカット。

上関へ出るとすれば、山道から鮎谷へは下らず、その手前で尾根筋を北上する長峰の道もあった。

要するに、古道マニアとして知ってるルートを残らず提供申し上げた。

論文がまとまったら送るとのことだったが、まだ、ない。長峰の尾根上に道があったとしても、人力車で通るのはさすがに無理だったのかもしれない。

ともあれ、バードは、その翌日、難儀な思いをしながら無事大里峠を越えた。

小国の町のことも、人夫と一緒に囲炉裏を囲んだことだから、渡邊邸が書いてなくとも、それほど不思議でもないといえ、言える。

夏のキュウリ

渡邊邸より面白いのが、この野菜のこと。

これほどキュウリを食べる地方を見たことがないと、黒川に来てバードは驚いている。子どもたちは朝から晩までかじっているし、母親の背で赤子までしゃぶっている。

バードの書きぶりは、前後入り組んで場所は厳密でない。

我が家の初代は慶応元年生まれで、生家は上関本村の宿場通り。キュウリをしゃぶる妹の子守だったかもしれない。

子どものころの私の夏も、いつもキュウリだった。手の平に握った塩をつけて、それを食いながら川泳ぎへ。夏の毎日。

それで今でも、年中、我が家の食卓にキュウリは欠いたことがない。

←上関宿



初夏に、新発田市米倉の「東北民藝館」を訪れる機会がありました。米倉は、会津街道の宿駅にしようと近隣の家々を集住させて作られた集落といわれ、いまでも街道の雰囲気を残しています。米倉にある「東北民藝館」は、この地の豪農、肥田野家の邸内8つの建物に、主に東北地方で集められた民具・骨董を1万点以上所蔵する私設の資料館です。様々な収蔵品が、広い邸内に所狭しと展示されています。仙台筆筒と思われる重厚な筆筒、亀田鵬斎の書、また、のろま人形があつたり、百万遍の数珠があつたりと、大変見応えがあります。館長は数学者であり、歴史にも造詣の深い方です。

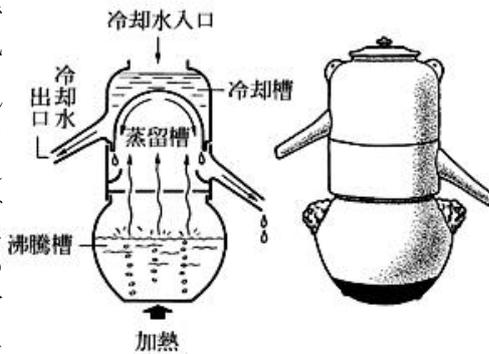
その膨大な収蔵品の中に一つ、私のここ数年の疑問を解決してくれたものがありました。

一昨年、渡邊家の所蔵品台帳をじっくりと眺める機会がありました。この台帳に、面白い形の陶器が載っていたのです。伏せたティーカップを三段に重ねたポットのような姿ですが、何に使うか、どう使うか全く見当が付きません。台帳では、「調理器具」に分類され、名称は書かれていませんでした。

この不思議な陶器が東北民藝館にあり、ランビキという蒸留装置だと判明しました。日本語本来の語彙「和語」や「大和言葉」には、ら行で始まる単語は存在しなかったといいますが、

このランビキも、アラビア語、ポルトガル語に由来します。(国語辞典の見出しをご覧ください)と、ラ行が極端に少ないことがわかります)

ランビキは、「熱水蒸留法」のため、三段重ねの装置になっています。例えばラベンダーなどの精油をする場合は、最下段に抽出原料(ラベンダー)と水を入れて加熱し、最上部には冷水を入れます。すると、水蒸気と共に上昇する精油成分が、冷水が入っている最上段の底で冷やされ、露として中段の樋に溜まり、管を通じてフラスコなどの容器に流れ込み、精油が抽出されるという仕組みです。



広辞苑「ランビキ(蘭引)」より

日本で見られるランビキの多くは陶製で、江戸時代には植物精油や化粧用香水、または蒸留酒を製造するために、医家や薬種屋、上流家庭の茶席などで使われたようです。

私が把握している限り、関川村内でランビキ

を所蔵している方は、渡邊家、平田大六さんです。渡邊家も平田さんのお宅も酒造業の關係で所有されていたのでしょうか。なお、最新型の蒸留器は、歴史館の研究室に置かれています。(田村舞子)

参考文献 民具学会編一九九七「ランビキ」『日本民具辞典』ぎょうせい出版

方言一考・ひとかたげ

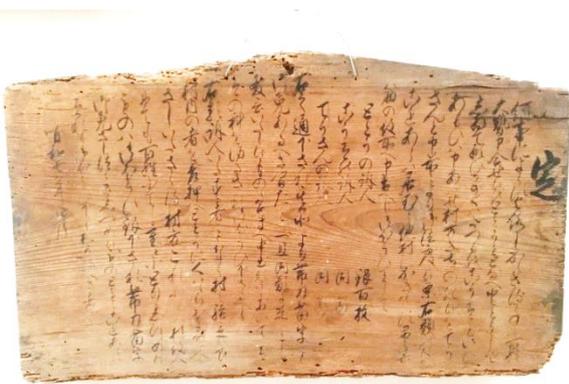
「ひとかたげ」は一食分という、意味の特定された方言ですが、この「かたげ」は立派な古語で、私が高校の時から愛用する古語辞典にも「(片食)一回の食事」「食事の回数数を数える語」と載っています。「おつてぎ」(大大儀)や「しよし」(笑止)のように古語が地方に残る、貴重な例です。ただ、私は意味をずっと誤解していて、「二抱え」と語感が似ているために「たくさん」だと思っていました。「粟をひとかたげ拾った」は「粟を袋に入れて担ぐほど沢山拾った」だと勘違いしていました。念のため、この村に生まれこの村で生きて四分の三世紀の御婦人方にお聞きしましたら、辞書にある通りの答えが返ってきたのです。さて、正しい意味を知って思い出したことがあります。以前某保存会の事務局長をなさっていたK氏は、邸内で拾った銀杏をひとかたげずつ袋に入れて売り歩

いていたことがあります。少しでも保存会の収益になればという、涙ぐましい些細な努力です。公民館にやってきて、一袋五百円で職員に売りつけました。市場の倍の価格に思われましたが、買わないといつまでも駄弁を弄するので全員買いました。二袋も買った人がいたのか、売り上げた小銭を当時の課長補佐I女史に札に替えてもらい、ちようど五千円札一枚を封筒に入れて、意気揚々と帰っていったのです。ところがしばらくすると焦った様子で戻ってきました。そしてI女史の机の周りをぐるぐる回り始めました。事情を聞いても「ごもごも口ごもるばかりだったのですが、たまりかねたI女史が問い詰めると、たった今喜んで持って帰った五千円の入った封筒をどこかに落した、と告白したのです。皆で大騒ぎして探しましたが、結局見つからず、「いつも世話になつている公民館の職員にただでくれれば良かったのに」と、株も大いに落としてしまいました。毎年秋には某邸内の銀杏の木は黄葉し、沢山の実をつけますが、以降彼がそれを持って公民館に来ることはなくなつたのです。(安久)

モノ言つもの・一揆取締り高札

高札は幕府や藩から出される命令などを書いた板で、村々の人目に付き易い場所に掲示し

ました。この高札は江戸時代の明和七年(一七七〇)、朴坂村(現在の朴坂集落)に立てられたもので、当時庄屋をしていたと思われる佐藤修一氏の土蔵に残っていたものです。江戸時代、藩の重税に対して農民は、徒党(ととう)強訴(こうそ)逃散(ちようさん)・集団で他の土地に逃げる)などで反抗しました。この高札にはそれらを禁止することはもちろん、そういう目論見を密告したものには銀百枚を与え名字帯刀を許するという法外な報酬を与えることも書いています。農民が団結することを恐れた政策でした。今、昼過ぎに放映されている、視聴者の少ない時代劇の中に現れる農民の姿が、この村にもあったことが伺われる資料です。(安久)



歴史館行事の報告

○十三峠歩きと宿場巡り⑤朴ノ木峠と足野水宿
10月16日(土)、総勢21名

○秋の健康登山「牟礼山とブナの巨木」10月29日
(土)、総勢29名

○秋の美術館巡り「天童市美術館、山形美術館」11月5日(土)、総勢40名

○歴史講演会「田麦掘割訴訟大騒動の真相」10月20日(木)講師の渡辺伸栄さんに、田麦掘割訴訟の真相と、中心人物平田平太郎の大願とはいったい何だったのか、お話ししていただきました。

○歴史講座10月「岩船地域の医療のあゆみ」、11月「大したもん蛇まつり誕生秘話」講師の佐藤忠良さんに、現職時代の思い出も含め、ビデオなどを用いながらお話ししていただきました。

○古文書解読講座(9月〜12月)進捗状況・与四良さんは、無事下関に帰ってきました！冬季は渡邊家文書・平田甲太郎家文書を読んでいます。

お知らせ

○年末年始の休館 12月29日〜1月3日まで。

○村民ギャラリー「新春書き初め作品展」会期：令和5年1月4日(土)〜1月30日(日)です。

○山と花のスライド解説会 1月15日(日)午後

いわかがみ 第九一号

発行日 令和四年十二月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300